



TITLE:

明代泉州回族雜考

AUTHOR(S):

寺田, 隆信

---

CITATION:

寺田, 隆信. 明代泉州回族雜考. 東洋史研究 1984, 42(4): 619-642

ISSUE DATE:

1984-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153926>

RIGHT:

## 明代泉州回族雜考

寺田隆信

中國には現在、五十幾つかの少數民族がいるといわれるが、回族はその一つである。彼らは比較的人口が多く、他の少數民族が特定の地域に集中して住むのに對し、中國本土の各地に廣く分散して、漢族とまじりあつて生活している。北京・天津・太原・西安・開封・南京・泉州・昆明などの都市には回族的居住區があり、天津市の南方に回族自治縣が設けられているのを、筆者は實見している。

回族という名稱は「回回」に由來する。すなわち、田坂興道氏によれば、回回という文字は唐代の回紇・回鶻に發し、遼代末期にはじめて文獻にあらわれるが、最初は全く宗教的意味をもたなかった。ところが、時代の經過にともなつて、その指す地域——葱嶺の西方および東方の地域にイスラム教徒が多かつた關係から、文字の起源とは全く無關係に、イスラム教徒をいう用語となつた。そして、彼らの奉ずる宗教を回回教あるいは回教と稱するにいたり、ついで、回教を信仰する人々を回族とよぶようになったといふ<sup>(2)</sup>。したがつて、回族とはイスラム教徒のことであり、嚴密な意味での民族的呼稱ではない。現在、中國本土に居住する回族は、漢語を話し、漢風の姓名をもち、漢族との間に身體的相違をほとんどもないのである。

ところで、回教の中國への傳來は唐代にさかのぼるが、唐代の回教は外來寄寓の回教徒、つまり西方から來住した人々

をはなれては存在しなかった。宋代でも事情はほぼ同様であったが、この時期、漢族の間にも多少の改宗者がはじめた模様である。元代になると、モンゴルの西征を契機として、回教徒の勢力は飛躍的な發展をとげ、甘肅・陝西・雲南から福建・浙江、さらに大都を中心とする直隸地方へと擴がっていった。これをうけて、明代とくに中期以降は、中國的回教あるいは中國的回教徒社會が形成されはじめた時期にあたり、中國回教史上、最も重要な時期となる。當時、回教は傳來以來、すでに年久しく、幾多の中國的要素を吸収しており、また、元朝滅亡後、西アジアとの接觸もほとんどなくなっていたから、本來のイスラム教とは非常に異なった、極めて中國的色彩の濃い宗教へと變貌し、土着化して、中國社會のなかに不動の、獨自の社會を形成するにいたったのである。以上の點について、内外の研究者の見解は大體において一致している。<sup>(3)</sup>

本稿は、右のような意義をもつ明代の、しかも、宋元時代以來、海外貿易の最大の據點であり、多數の色目人——その大部分はイスラム教徒であった——が居留していた泉州の、回族とその生活を考察の對象とするが、主たる資料は、泉州市泉州歴史研究會の編する『泉州回族譜牒資料選編』（一九八〇年八月刊）からえている。筆者ははじめ、この書物を南開大學の圖書館で見附けたが、のちに傅衣凌先生にお願いし、一本を頂戴して持ち歸えた。まず、このことを記して、傅先生に感謝の意を表わしておきたいと思う。

『資料選編』は縦二六センチ・横一五センチの油印本で、前言・目錄・本文を含めて一〇五葉、「泉州文獻叢刊第三種」として刊行されたが、體裁からみて、市販はされなかったと思われる。題名から知られるとおり、泉州地方で蒐集された回族の族譜から、回族研究に直接關係をもつと認められる資料を選択整理した書物であるが、取りあげられているのは「陳江丁氏族譜」、「榮山李氏族譜」、「清源金氏族譜」、「燕支蘇氏族譜」の四種である。ただし、本文九九葉のうち、七五葉は「陳江丁氏族譜」の記事が占めている。資料集としての制約があり、各族譜の編纂年代や經過を解説していないなど、不備な點も目につかないわけではないが、從來ほとんど研究されたことのない回族の族譜を扱っており、珍らしい資料集

といえるであらう。

## 二

前述のとおり、『資料選編』が主として「陳江丁氏族譜」の記事を収めているので、丁氏を中心に考察をすすめることにしたい。以下にみるように、丁氏は泉州回族の代表的存在でもある。

泉州市の南約一〇キロの海岸に、廈門への公路に沿って、陳江または陳垵とよばれる一郷がある。現地で聞いた傳説によると、この地はもと海であったが、五代の頃、節度使の陳洪進が海垵を築いて干拓事業を行ってから、人々が住みつくようになり、陳江あるいは陳垵とよばれるようになったという。陳垵は全長一〇キロにわたり、當時築かれたもののなかで最長の海垵であった。閩書卷八・方域志・泉州府の條に、

陳垵は陳洪進の築くところ、吟嘯浦東南流および羅裳東北諸澗を受け、西南に至り、分かれて衆港と爲り、二斗門より以って海に入る。郷を陳垵という。郷上の哈之亭は、百鮮の聚るところ、溝東の人丁、溝西の人林、皆衣冠の族なり。居人は井無ければ溝水を以って食を爲す。

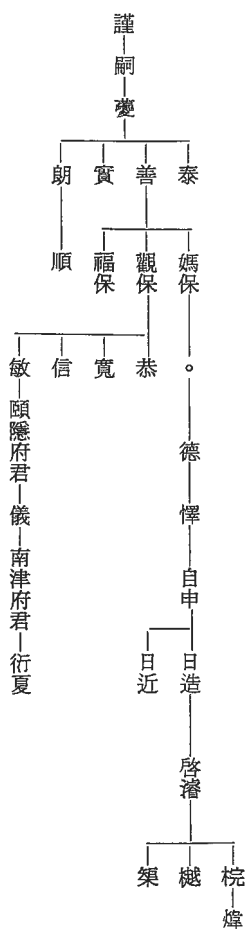
とあり、地元のいいたえと符合している。さらに右文は、その書かれた萬曆年間に、この地の住民のうち、丁氏と林氏が士大夫の家として知られていたことを明らかにしている。この丁氏こそが、以下において取り扱おうとする、陳江の丁氏である。現在、垵内は肥沃な農地となっているが、泉州海外交通史博物館調査組の報告によると、その現状がつぎのように紹介されている。

「陳垵郷は二三の自然村からなり、人口は九千餘人、萬丁と稱しているとおり、すべて丁姓である。二千餘人が海外に移住しているのを除き、のこった者の大部分は漁業に従事し、毎年各地に販運される海産物は數十萬担にたつする。郷の中央には丁氏の祠堂があり、建物は大きく、その様式は非常に風變りである。まんなかに白花崗岩で平臺が築かれ、その

上に祠堂の正堂が建っている。平臺下の周囲はすべて回廊で囲まれ、廊下は全部つながっていて、「回」字形をなしている。平臺上の正堂は廊下より約八〇センチたかく、中・左・右の三門によって、周囲の回廊につながっている。回廊部分にも前後左右の小門があり、出入口となっている。祠堂は正面が二メートル、奥ゆきが三六メートルあり、正門には澤山の彫刻がほどこされ、金箔がはられて、頗る華麗壯観である。祠堂左端の廊下に二つの柱礎がのこっているが、その様式は泉州の清浄寺に存するものと同じであるが、やや小さい。」

報告は右につづけて、陳埭に最初に定住したのは陳氏であつたと認められるが、陳氏の子孫は少くなり、その祠堂ものこつてはいるけれども、久しい以前から祭祀を行う人がなくなっていると記している。要するに、現在、陳埭の住民の大多數は丁氏だというわけである。先住の陳氏、明代には丁氏と對抗していた林氏の勢力はすでに衰え、丁氏が彼らを壓倒して今日にいたっていることが知られよう。また、泉州の回族としては、金・丁・夏・馬・葛の五姓が有名であると、『資料選編』の前言にはいうが、なかでも、陳埭丁氏は現に、當地最大の巨族として知られているのである。

さて、「丁氏族譜」<sup>(9)</sup>によれば、丁氏は南宋末乃至元初の頃、蘇州から泉州に移つて來たという。その世系圖をつくると、つぎの如くとなる。



丁氏の始祖は、節齋公、諱謹、字慎思（南宋淳祐二年八月一日〜元大德二年七月二五日）である。彼の時代に、丁氏は蘇

州から泉州に移った。すなわち、はじめ丁氏は代々洛陽に住んでいたが、丁維清なる者が蘇州太守となつて蘇州に移り、ついで丁謹が蘇州から泉州にかけて、商人として活動するようになり、やがて泉州に住居を構えるにいたつたと記されている。丁謹は陳氏を娶り、一子をもうけた。丁嗣である。

二世祖述庵公、諱嗣、字衍宗（南宋咸淳九年九月一日〜元大德九年四月一四日）は、陳氏を娶り、丁夔を生んだ。

三世祖碩德公、諱夔、字大皋（元大德二年二月一日〜明洪武二年六月一日）は、蘇氏を娶り、四子をもうけた。長子諱泰は若くして病没した。三子諱實、字彥忠、號樸齋（元至正七年正月二日〜明洪武一九年六月三日）は蘇氏を娶ったが、子がなかった。四子諱朝<sup>(10)</sup>、字彥明は妾腹の出で、陳氏を娶り、一子諱順、字世和をもうけた。以上のように、長子は夭折し、三子にも子がなかったから、丁氏の正統の家系は、結果的に次子によつて繼承されることになった。

四世祖仁庵府君、諱善、字彥仁（元至正三年一月七日〜明永樂一八年正月二日）、彼の時代に、丁氏は泉州城内から南方約一〇キロの陳江へ移住する。つまり、彼は陳江丁氏の初代というわけであるが、「族牒」には、その功績をたたえて、つぎのように書いてある。

業を城南の陳江に植て、因りてここに遷居す。業は日に以つて拓け、族は日に以つて大なり。子孫、今に至るまで廣く其澤を被り、縣々として替る無し。是れ誠に光前啓後の列祖なり。堂に遺像有り、士夫宿儒、其贊を題す。

丁善の夫人莊氏、諱細娘、字闔秀、諡淑懿は泉州永春縣の右族の出であり、宋の永春開國男少師公莊夏（宋史卷三五九）の六世の孫にあたる。父は閩、兄兼才は洪武三〇年<sup>(11)</sup>の進士で、湖廣左參議をつとめた。兼才の子、つまり彼女の甥にあたる敏も正統一〇年<sup>(12)</sup>の進士で、吏科給事中、雷州知府を歴任し、家は莊府と稱せられた。回教徒は異教徒との通婚を禁じられているから、莊氏も回教徒であつたはずである。丁善に嫁したのは、陳江へ移ったが、彼女の傳である「二莊孺人傳」によると、その間の事情はつぎのようであつた。

公（丁善）に語りて曰く、丈夫は當に一方に自營し、地力の出すところを括し、以つて贖産を長じ貢税に充つべし。

即ち進んで古人の邊餉を輸助するに效う能わず、退きてまた素封と爲る能わざるも、安んぞ能く市塵に向い賈豎と混わり、規々として微息を逐わん耶。遂に舅氏に従い陳江に徙トし、開基拓野し、築坡して以て海田を埒ぐ。而して瘠化して肥と爲り、履畝して以て蕩産を徴し、什に其八を受け、家用益ます饒なり。

相當の賢夫人であつたらしく、彼女の提言によつて、丁氏は商業をやめ、陳江に移ることになった事情がうかがえよう。そして、三子を生んだ。長子は諱媽保、字世隆、次子は諱觀保、字世孚、號誠齋、三子は諱福保、字世章であり、父の遺産を三分して、それぞれ一家をたてた。

長子媽保の家系は、その子<sup>(13)</sup>（諱不明）をへて、孫の丁德、その子丁懌へとつづいた。丁德、字崇新、號少逸、若くして生員となったが、家郷を離れることなく、八七年の生涯を終えた。丁懌、號後吾、幼時から學問に勵んだが、家政を綜理し、鄉黨の指導者として、九〇歳の長壽を全うした。その子に丁自申がある。

丁自申<sup>(14)</sup>、字朋獄、號槐公、嘉靖二八年の舉人、同二九年の進士で、南京工部主事から郎中、ついで順慶、梧州の知府をつとめたが、晩年は郷里に歸り、讀書と著述の生活をおくり、「三三陵集」<sup>(15)</sup>を著わしている。その功により、父懌は南京工部主事に封ぜられた。數人いたらしい子のうち、日近と日造の名が知られている。

丁日近<sup>(16)</sup>、字光元、號午亭、自申の第三子であるが、監生から出身し、萬曆一七年に進士となり、鄆城知縣、南京戸部江西司主事をつとめた。その兄か弟に日造、號肖槐があり、生員でおわつたらしいが、子の啓濬は進士となった。

丁啓濬<sup>(17)</sup>、字享文、號哲初、のち廖初と號した。萬曆一六年の舉人、同二〇年の進士、寶慶府の知府、ついで杭州府の推官から、戸部主事、吏部文選司主事、考功員外郎、文選司郎中、南京太僕寺少卿をつとめ、崇禎年間には太僕寺卿から刑部右侍郎に昇進したが、溫體仁と對立し、その入相を機に歸郷した。卒するに及んで刑部尙書を贈られ、祭祀を賜わるとともに、父日造は長沙府推官に封ぜられた。彼はまた、丁起濬の名で列朝詩集（錢謙益撰）に作品を収録される詩人であった。啓濬の第五子丁椀、字幼薦、號願初は一七歳で生員となったが、二三歳で病死した。その他の二子も父の功により、

丁樾は都察院照磨を、丁槩は監生を與えられた。さらに、丁梲の子丁燁、字思晦、號碩泉も生員であつたことがわかつてゐる。

このように、媽保の家系は、丁徳がはじめて生員となり、その孫丁自申が進士となつて以來、三代にわたつて進士をだした。「族譜」に引く「東崖雜記」によると、明一代をつうじて、三代の進士を生んだのは、泉州府下では傅・趙・丁の三姓のみであつたというが、その丁姓とは、媽保の家系を指しているのである。

これに對して、次子觀保の家系は、その第四子丁敏（毅齋公）から、子の頤隱府君（諱不明）をへて丁儀につたえられた。丁儀、字文範、陳江の汾溪に居を構えたところから汾溪先生とよばれる。門生史于光の書いた「汾溪公行狀」によれば、弘治一四年の舉人、同一八年の進士で、四川按察司僉事などをつとめ、四九歳で官に沒したとある。彼の兄弟に仲芳と文叔とよばれる人物がいたらしく、のちに觸れるとおり、仲芳は墓地紛争に丁氏の代表格で登場するが、彼らの經歷は不明である。丁儀の子に南津府君（諱不明）があり、その子が丁衍夏である。

丁衍夏については、閩書卷七方域志・泉州府晉江縣・清源山の條に、「皇朝萬曆の間、邑人丁衍夏なる者、北山下に隱れ、常に考古を以て業と爲す」とある。また、乾隆晉江縣志卷一三人物志・隱逸の條にも、「丁衍夏は萬曆間の人、始め城の西隅に居り、曰にして北に遷る。其の居るところを名づけて泰清隱君雲廬と曰う。晩に益ます落寞するも、縦心浩然、預め誅もしくは銘を爲り、時に歌いて以て自適す。其言は横放超軼たり。蓋し達人の觀あり、方外の士なり」とあつて、地方的には名を知られた文人であつたことがわかる。

このほか、「丁氏族譜」には、系圖のどこにおかるべきか不明の人物が二〇人ばかりゐる。また、閩書卷八一〜八七英舊志、萬曆泉州府志卷二〇〜二二人物志にも丁姓を名のる人物が數人記載されている。いま、乾隆晉江縣志卷九〜一四人物志から、生員以上の身分を取得した者を擧げておくと、丁啓沐、丁棟（丁自申の曾孫、順治五年の拔貢生）、康熙五二年の進士丁蓮、康熙五九年の舉人丁颺、雍正元年の歲貢生丁奇崑らがある。明代中期から清代初期にかけて、丁氏が代々衣冠の



族であったこと、つまり中國的教養を完全に身につけた一族であったことがうかがえるであろう。

なお、三子福保の家系について、「族譜」は何も記していない。

### 三

陳江丁氏の家系は大略、以上のとおりであるが、そこには丁氏が回族である證據は一つも見出せない。『資料選編』の前言によると、泉州回族の族譜は、政治的あるいは社會的な理由―色目人に對する蔑視と壓迫のため、一族の起源を直書することなく、中原の望族の後裔であると記すことがあるという。であるならば、泉州移住以前の丁氏の系譜は疑わしく、始祖丁謹は西アジアから渡來した色目人であった可能性もでてる。また、泉州海外交通史博物館調査組の現地報告によると、解放以前、丁氏の人々は先祖が「蕃人」であることを否定し、漢族であると主張しつづけてきたとある。<sup>(19)</sup>この點に注目しつつ「族譜」を読むと、その遠祖については三説が紹介されている。

第一説は丁衍夏の「纂述世謨」にみえ、太公望呂尙の第四子呂伋にはじまるとする。史記卷三二齊太公世家に「蓋し太公卒して百有餘年、子の丁公伋伋立つ」とある人物である。ただし、この説については、すでに數千年をへ、典故も失われているため、それを確かめる方法もないと、丁衍夏自身が書き加えているから、そのまま信ずるわけにはいかないであろう。

第二説は「譜牒」にみえ、丁顗にさかのぼるという。その孫である丁度の傳（宋史卷二九二）によると、丁顗は五代の末、開封祥符縣の人で、契丹に捕えられたが逃げ歸った經驗をもつ。その子丁逢吉は醫學をもって眞宗につかえた。さらに、その子丁度（字公雅）は大中祥符年間（1010-1022）に服勤詞學科に擧げられ、諸官を歴任したのち、尙書右丞をもって没したが、死後、吏部尙書を贈られ、文簡と諡を賜わった。邇英聖覽一〇卷などの著作があるほか、曾公亮とともに武經總要四〇卷の編纂

を主宰した。度の子の丁諷も集賢校理をつとめた。

第三説は「感紀舊聞」(作者は多分、丁衍夏であろう)にみえ、丁敏(毅齋公)の手書した文書に「賽典赤回瞻思丁に由る云々」とあると記す。賽典赤瞻思丁 Sayyid Ejell Shams al-Din (一二一一～一二七九)は元史卷一二五に傳をもつが、ウイグル人で、一名を烏馬兒ともいい、ボハラの出身らしい。元の太祖・太宗・憲宗・世祖の四代につかえたが、元初に中國へ來住したイスラム教徒のなかで最も有名であり、中國回教徒の間では永く尊敬の對象とされた人物である。彼を始祖とすることについて、「感紀舊聞」の作者は、つぎのように考えている。

夫れ瞻思丁の寛仁を以って、而して子孫の貴盛を膺う。豈に衆多ならざる有らんや。我朝に入り散處するに及び、夷姓を去り、而して其名の末字を以って氏と爲すこと。未だ知る可からず。元前の中華に丁有りと雖も、未だ必ずしも祖回の教を祖とせず。吾家既に回回を教宗し、而して列祖世々寛仁を載す。謂うところの其祖に似たる者、非なる耶。當に毅齋公紀載の日、瞻思丁の蘿槃の撫を去ること、僅かに百餘年、未だ據無きを必せざるなり。

丁氏が回教徒であるのを明言したうえで、若干の留保を含みつつ、丁敏の記述を容認したいとする姿勢をそこに読みとるのは困難ではあるまい。賽典赤瞻思丁を祖とするというのは、回族に普遍的にみられる始祖傳説であるが、以上の三説のうち、史實はともかくとして、第三説が最も實情には近いであらう。

右文はつづけて、第二説について、「養靜公に至り撒氏成卒の誣に慄慄とし、曾社師に過聽して、丁度を援き、而してこれを祖とす。以って其裔の回回に出でざるを明らかにするなり」と記し、丁度を遠祖とする説が、丁氏が回回の子孫でないことを證明するために作爲されたものであるとしている。養靜公は諱彰、丁儀の叔父にあたると思われるが、<sup>(21)</sup>「撒氏成卒の誣」とは、つぎのような事件であった。<sup>(22)</sup>「雪成説」に記載がある。

成化十有一年に逮り、家に丁陞爭財の訟有り。里猾曾細養、求賄して得ず。我姓は撒、南隅の河南彰德衛の成を脱せんとして姓丁に易うと誣す。維の時、所司の版籍は壞たれ、吾故藏の占籍帖も符する莫し。爭論すること二十有八年

にして決せず（古本には一十八年に作る）。……而して家は窘と爲る。逸齋・頤隱（丁儼の父）二公皆な弱年、相い與に謀りて曰く、彰德は中州の善地なり、戍すること何ぞ惡まん。但、我を使得撤氏の戍に代らしむ。後人、丁氏を捨てざれば、而して其祖を忘れん哉。是れ宜しくこれを争いて已む可からざるべし。

こうしてはじまった訴訟事件が「撤氏戍卒の誣」である。結局、丁氏は勝利をおさめ、河南の戍地に移らなくてすんだのであるが、この時、丁軫は、回族でない根據として、始祖が丁度であると主張したのだと、前掲「感紀舊聞」は記しているのである。公然と回族を名のって生活することは、決して有利な條件ではなかった事實がうかがえるであろう。

丁姓の由來および始祖が誰であつたかは別にして、丁氏は南宋末乃至元初の頃から泉州に住み、三代を過したのち陳江に居を構えるにいたつた。その時期について、丁衍夏の「宗聚説」には、「元の至正に城南より遷る」とあるから、元末至正年間のことであつたと考えられる。宋代以來、泉州の城南は泉南とよばれ、晉江に臨んだ地區には外人居留地<sub>(24)</sub>蕃坊が設けられていた。丁氏もこの附近に住んでいた模様であるが、元末に南方一〇キロの陳江へ移り住んだのである。おそらく、戦亂を避けてのことであつたろう。

元末の泉州は戦亂の巷と化していた。<sub>(25)</sub>乾隆晉江縣志卷一五雜志・紀兵の條によると、至正三・一〇・一二・一四の各年に反亂がおこつたと記録され、さらに同一七年からは義兵賽甫丁・阿迷里丁ら亦思巴奚兵の反亂がおこり、泉州の住民は大損害をこうむつたとある。兵亂は二六年までつづき、二二年以降、反亂軍の指導權は那兀納が握っていた。那兀納について、晉江縣志は、

西域の那兀納なる者、諸蕃の互市を總ぶるを以て泉に至る。元末に兵亂するや、遂に泉州を攻めてこれに據る。

と記すが、西域人で「諸蕃の互市を總ぶ」といえば、宋末元初に活躍した蒲壽庚の身分と似通つていよう。「清源金氏族譜」におさめる「元武略將軍一菴公傳贊」には、那兀納が蒲氏の女婿であつた事實をつたえている。那兀納らの亂は四年あまりつづいて鎮壓されるが、そこで活躍した武官の一人に千戸金吉がある。清源金氏の始祖であり、「族譜序」には、

つぎのようにみえる。文中に「蒲那之亂」とあるのは、蒲氏と那兀納の指揮する兵亂を指す。

金氏の先、一菴公なる者、名は吉、上都人、勝國の期、武略將軍に擢んでられ、千戸に上り、符節を賜い、泉南に鎮す。蒲那之亂に、泉將さに殲せんとす。公、陳駭の説に感じて開門納兵し、那を誅して反正す。泉人、公の功を種享して與に多しと爲すなり。

金氏は匈奴休屠王の太子金日磾（漢書卷六八）の後裔と稱するが、回族であつたことは、金吉の「傳贊」に「公命を以て東郭荔林の原に營墓す。土石簡素に、悉く夷風に依る」とあるによつて知られる。また、彼の長子金阿里の「傳贊」にも、つぎの記載がある。

公、平日輕財樂死、慈仁廣愛、敦く回教を尙ぶ。回人、泉中に舊と清淨寺有り。圯廢すること歲久し。公、木石を以て一新す。鉅費算うる靡く、樓宇壯敞にして、今に至るまで觀を修くす。回人これを德とし、相い率いて石に勤して公を壽すと云う。

那兀納の亂がおさまつた至正二六年の八月には、元朝を支持する陳友定が泉州を占領した。福建行省平章政事に任じられた彼は、やがて福建全土を制壓するが、同じ二六年、一時元朝に降つていた賽甫丁が再び反旗をひるがえして泉州に據る事件などもあり、兵火は容易におさまらなかつた。泉州に平靜がもどるのは、二年ののち、洪武元年、湯和の率いる明軍が陳友定を討伐して以後のことになる。十數年間におよぶ戰亂をつうじて、泉州の社會と經濟は大きく破壊された。

元朝時代、支配者と密接な關係にあつた色目人あるいは回教徒の横暴は目にあまるものがあつたらしい。たとえば、前掲「一菴公傳贊」には、蒲壽庚とその子孫の行狀を、つぎのように記している。

蒲壽庚、武臣を以て叛す。……元に表降し、賜爵鎮國して、州政を統べ俾めらる。父子繼世、寵を恃んで專制す。峻法嚴刑、以て征科を遂げ、人々薰炎に苦しむ。甫めて九十年、……蒲賊死すや、其婦那訥訥（那兀納）自立し、據土擅賦して、大いに慘夷を肆にす。

また、「榮山李氏族譜」に載せる「垂戒論」(宣德元年・李廣齊撰)にも、つぎのようにある。

元氏の失馭するや、色目人の間に來據する者、惟だ我泉州最も熾なりと爲す。部落蔓延、大いに凌暴を肆にし、以て我生靈を塗炭す。

このように、權勢をふるっていた色目人あるいは回教徒にとって、元朝の滅亡は、彼らの存立基盤を失わせるほどの大事件であつたに相違ない。彼らの生活は、これを機に一變したはずである。戰亂を避けて陳江へ移り住んだ回族丁氏は、この激變の時期をどのように生きたのであろうか。前述のとおり、陳江丁氏の基礎を固めたのは丁善であるが、六世孫にあたる丁自申の書いた「仁庵府君傳」から、その間の事情がうかがえる。

元の至正末、父大泉公に隨ひ、城南門外二十里許に徙居す。是れ陳江爲り。今、族姓江上に櫛居するは公(丁善)の貽すところなり。

公の人と爲りは、倜儻志大、才略を以て里中に雄たり。陳江故郷の巨姓、著代年遠、公、後至して自り、一二門第相い埒しき者を擇んで與に賓禮を爲す。而して諸族も俛首承伏せざる無し。

遷居そうそのの丁氏は、すでに一郷の有力者の列にはいつていたようである。しかも、海濱の生産手段である海蕩の大部分を所有する豪族でもあつたことが、つぎの記載によつて知られる。

江を環り負海して居る。而して海潮の往來する處、其地鹵蕩にして、宜しく海錯諸鮮を生ずべし。居民、産を受け以て業と爲す。これを海蕩と謂う。沿海瀾漫、一望數千頃、大約、産は十を以て計り、公は七八を有す。其の二三(29)は則ち公、與に賓禮を爲してこれを得たり。而して他はこれに與らず。

明朝が成立し、戸籍が更定されるにおよんで、丁善は自らすすんで竈籍を選んだ。藤井宏氏によれば、明代の竈戸は國初以來、鹽場附近の民戸より尙充される良民を主體としたというが、丁氏は自發的に政府の要請に従つたことになる。

國初、版籍を更定するに、編戸の多く籍民を占むるを患う。官爲めに格を出し、稍や軍鹽二籍を右にして、民をして

軍と爲るを病まず、趨鹽を樂しめんと欲す。公、縣に抵り自ら言う。三子有り、願わくは各々一籍を占めんと。遂に三子の名を以って首實し、而して鼎立して受鹽す。

萬曆泉州府志卷七版籍志・鹽課の條によると、晉江縣には潯溪場と汭州場とが置かれているが、丁氏は、そのどちらかに屬する竈戸であつた。とすると、前掲の、丁善が所有したという海蕩には、鹽の生産場が含まれていた可能性もでてこよう。

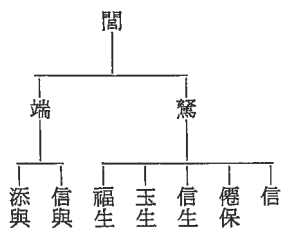
陳江遷居當初の丁氏の暮しぶりは、以上によって大略をうかがえるけれども、それは決して平穩無事なものではなかつた。社會變動の大波をうけ、丁善自身が南京の獄舎につながれるという不運を経験してもいるのである。白蓮教をめぐる事件にまきこまれた。

時に海内甫めて定まる。尙お蒙古色目の舊を襲い、里社、好んで白蓮會を爲り、衆志を搖惑す。官、厲禁すと雖もなお戢せず。有司、公（丁善）の行誼を廉し、郷を糾せしむ。公、岸溝諸黨の燭禁を發し、官を以ってこれを治せんと白請す。新令方に嚴しくして、犯網する者衆く、獄を致すも歳久しく決せず。奏して刑部に下し、公と諸黨を逮えて京に至る。公の長子を連及して俱に係獄す。

白蓮會を告發したものの、思いもかけず獄舎につながれることになった丁善と長子媽保は、逆に誣告にあたるとして死刑に處せられようとする。だが偶然の出來事から彼らの無實が明らかとなり、釋放されて泉州へ歸ることができた。事件の全貌は以上のとおりであるが、父と長兄の無罪を證明するのに活躍したのが次子觀保である。その傳「誠齋公傳」には、父仁庵公、郷里と構執し、（他本には郷里の張・林・陳・李の四姓と相い訐告すと作る）曾って扭禁を南京刑部の牢中に受けた。

とあり、陳江に先住の、おそらく漢族と思われる張・林・陳・李姓との確執から生じた事件であつたことがわかる。事件のおこつたのは洪武年間のことであつたはずであるが、元朝が減んで明朝が成立した當初、かつて色目人として漢族より

上位にあった回教徒が、色目人排斥の風潮のなかで、漢族社會に定着して行くためには、かなり複雑な経過をたどらざるをえなかったであろう。この事件は、その一端をうかがわせるが、より深刻な事例は「榮山李氏族譜」に見出すことができる。李氏の家系はつぎのように整理できる。



遠い祖先の事蹟は不明であるが、睦齋公諱閻、字君蘇（元致和元々明洪武一七）にはじまる家系である。「族譜」に載せる「李氏世系圖」によれば、彼は海外貿易業者であつたらしい。

十九世睦齋、諱は閻、字は君蘇、……前人積蓄の貲を承籍し、常に家客を俵して、海外諸國に航泛す。

彼はまた回教徒であつたようで、「睦齋公墳誌」には、「睦齋公の夷教を率用するや、本づくところ有るに似たり。或いは元俗に沿うか、皆詳らかにす可からず」とある。ところが、彼の次子である李端（元至元一〇〇明永樂二二）の傳「二十世直齋公墳誌」には、驚くべき記載がある。

諱は端、字は景順、號は直齋公、是れ睦齋公の次子なり。人と爲り聰敏敦厚、……家法は嚴肅儉約なり。市塵に居ると雖も、然れども養心すること靜素、自ら其兄の異習を革む能わず、乃ち退きて城南に自居し、諄々と子を教え、典籍を稽訂す。而して詩書の幹、煥然として慕う可し。

其兄とは陸齋公間の長子驚をさすが、「自ら其兄の異習を革む能わず、乃ち退きて城南に自居す」とあるのは、兄の奉ずる異習（回教）を、彼自身は棄てたことを意味すると解せられる。そして、長子驚の五子のうちの二子は林姓を、他の三子と次子端の子孫は李姓を稱するにいたる。すなわち、「陸齋公墳誌」にいう。

驚は五子を生む。長は諱信、次は諱僊保、三は諱信生、四は諱玉生、五は諱福生、端は二子を生む。長は諱信與、次は諱添與、信與嗣がざるに因り、惟だ添與は永樂二十年壬寅、始めて南安縣三十都に籍す。姓は李、廣齊と改名す。

時に信生これに従う。宣德天順年間<sup>30</sup>に及び、玉生は福生の二子と偕に、南安縣三十都に入り、亦改めて李に従う。獨り信は僊保と與に泉城に居住し、支屬仍お林を姓とす。而して二姓の子孫、祖公を并すと云う。

同一人物について、その孫の代にいたり二姓にわかれるというのは、漢族の習俗としては有りえないことである。おそらく、明朝の成立にともない、漢姓を稱する必要が生じたため、このような事態となったと思われる。ただし、外來イスラム教徒の改姓は、當時、一般的且つ普遍的な現象であつたが、この時、李氏を稱した一派は回教を棄てたのである。李添與あらため李廣濟の「垂戒論」には、異教を奉ずる伯父<sup>30</sup>驚に對する非難の言葉がみえる。

今、伯父は衣冠縉紳の裔と爲るに、色目の俗に迷い、而して悟る能わず、其祖を祖とせず、而して人の祖を祖とす。其行を行わず、而して夷狄の行を行い、其子孫を俾て胥に夷と爲さしむ。

始祖間が泉州に住んで海外貿易に従事し、且つ回教徒であつたところから考えて、榮山李氏がイスラム商人の家系であつたのはほぼ間違いない。それが漢姓を稱するにあたり、一部は林姓を名のつて回教徒としてのこり、他の者は李姓となつて棄教したのである。特權的立場を失い、壓倒的多數者である漢族のなかで生活しなければならなくなつた時、父祖傳來の信仰を守りつづけるのは、非常な困難をともなつたであらう。そこで二姓にわかれ、かろうじて信仰と習俗を維持しようとしたのではあるまいか。あるいは、一族のなかに、信仰の繼續をめぐる對立があり、その結果として二姓にわかれたのかも知れない。いずれにせよ、彼らの苦惱と動搖がどの程度のものであつたか、よくわかるであらう。



かくして、林氏は泉州城内新車二橋に、李氏は南安縣三十都にわかれて住むことになったが、萬曆二八年に李志輝が書いた「詳世系譜」によると、隆慶五年にいたり、兩氏の子孫百餘人が集り、始祖睦齋公の墳墓を修理して祭祀を行い、ついで祭田を設けて祭祀を繼續し、萬曆二八年にいたったとある。信仰を興にする兩氏が、祖先を共有するとして、祭祀を協同行うというのは、奇妙な風景ではあるが、始祖を同じくする宗族意識は、信仰の相違をこえ、依然として存在しつづけていたわけである。なお、「詳世系譜」は萬曆二八年四月にはじまる、刑恆の祖墳損壞をめぐる訴訟に對し、兩氏が團結して對處することを求めて、つぎのように記して終っている。

此自り以後、吾家に刑家と姻親を爲す者有らば、獨り此義を以て自斷す可からざる乎。既盟の後、設し族内の一二の子侄にして敢えて違議不遵する者有れば、則ち會衆して家に到り切責し、外族に革出し、以て將來を儆す。自ら相い矛盾すること勿れ。至囑す、至囑す。

#### 四

本來、イスラム教にあっては、偶像崇拜を禁じ、家廟や宗祠の類は絶対に許されず、血縁的結合の象徴たる族譜・家譜なども、あってはならないものである。しかし、すでに明らかたとおり、泉州の回族には、それらをもつものがあつた。また、死者は三日以内に共同墓地に埋葬すべきであり、先祖代々の墳墓の地などもありえないが、<sup>(31)</sup>榮山李氏の如く、林氏と共有の祖墳をもち、祭祀をつづけるものがあった。「燕支蘇氏族譜」には「世記誌」があり、回族である蘇氏が祖先を祭つた儀式を詳細につたえてもいる。陳江丁氏の場合も例外ではなかったが、丁氏については、墓地をめぐる紛争がおこり、訴訟事件にまで發展した。事件の全貌は、「本支世表」に記録されている。

丁氏の始祖丁謹、二代丁嗣、三代丁夔の墓は、夫人のそれとともに、泉州府城の東の城外、三九都東塘頭靈堂山につくられた。しかし、四代丁善の時、陳江へ移住したため、墓のそばに小屋を建て、王顯祥なる者に墓守を頼むことになった。

のちに王氏の子孫が絶えると、近くに住む徐糞が墓守をつぎたいと申し出て來たので、これを認めたところ、その子の徐福・徐黠は墓地を壊し、彼らの所有地とともに作物を植えるの舉にでた。當時、丁氏は前述の「撒氏成卒の誣」にあって窮迫していたため、二〇年ばかりの間、決着をつけられなかった。徐福はこれをよいことに、墳墓のそばに塙を築いて、墓地の大部分を自己の土地としてしまった。これに對し、丁氏の側では、丁儀が進士となり官界に地位をえたのを機に告訴にふみきった。正徳七年八月のことである。

徐福はこの時六十歳、泉州府衛中千戸所百戸陳諒の部下の正軍で、東門外三九都の驛路鋪に、丁氏の墓地と鄰りあわせて住んでいた。成化二〇年、丁仲芳の伯父朝制は徐福の父糞に祖墳の看守を依頼し、墳旁の土地に果樹を植え、工資とするのを認めた。ところが、丁氏の住居は陳江にあり、見まわりに来る回数が少いのを知ると、土地と果樹を自分のものとし、弘治一年には住居を丁氏祖墳の旁に移して周圍に塙を設けるにいたった。丁仲芳がその行爲を非難すると、徐福はこれに反撃し、二〇年ばかりの間、紛争はつづいたが、仲芳の兄丁儀は、仲芳に命じて按察司に、ついで分巡福寧道臺段某のもとに徐福を訴えさせたのである。すると、徐福は、仲芳が勢力を頼み、軍戸の財産を強奪しようとしていると逆訴してきた。同年一〇月、仲芳はさらに都察院に訴え、ついに道臺を動かして實地檢證が行われるところに着つた。

道臺の命をうけた泉州知府は、徐經歷を派遣し、仲芳と福をともなつて現地に行き、里長蘇道、鄰佑王明らをよびだして測量させた。その結果、丁氏の墓地が徐福に侵奪されていたことが明らかになった。また、近くの住民陳添が路端から一つの石碑を掘り出し、丁氏の墳碑であることが確認され、決定的な證據となるなどして、丁氏は勝訴した。この間、五年の歳月が経過していた。

かくて事件は落着し、墓地の全域は丁氏のもとに返還された。しかし、徐福は長年、この土地を耕し、荔枝を栽培していたので、その費用を償う意味で、丁氏が銀一五兩を徐福に與えることを求められた。また、徐福が丁氏の墓地内に建てた家屋についても、移轉の補償として銀二〇兩を支出せよとも判決された。つまり、無條件の勝訴ではなかったのである。

なお、萬曆一〇年の丈量によると、當該土地の面積は、墳地を除いて、六畝五分四厘四毛四絲、三九都在字號の三五九二・三・四號に登記されたという。

丁氏には、右の東塘頭の墓地のほかに、鹿園の墓地があった。そこには四代丁善らの墓がある。家藏の故券によれば、その土地は潘氏から買いうけたものであった。すなわち、洪武二七年五月に潘冀掃から、永樂七年一二月に潘冀沙から、永樂一三年六月に潘潤生から、永樂二年八月には冀掃の母の葉眞娘から、景泰五年には潘嗣祖からといったふうに、潘氏の土地・家屋・樹木などを順次購入して、墓地として整備して來たのである。

ところが、成化一七年九月に潘吼仔が土地を取りもどそうと訴訟をおこした。しかし、丁氏には合同買賣契約書があって、吼仔の訴えは不發に終わった。ついで嘉靖二年にいたり、潘氏の姻戚と稱する呂希春なる者が潘吼仔の狀稿をえて、再び墓地をめぐる紛争をひきおこした。——以上は「一辨呂希春奸妄說帖」に記すところであるが、この争いは、たまたま倭寇の侵攻が激しくなり、決着をつけるにはいたらなかったらしい。したがって、その後の経過は不明であるが、萬曆一〇年の丈量によれば、鹿園墓地の面積は三畝二分五厘、三七都鳴字號の一一〇三號に登記されていた如くである。

丁氏の墓地については、なお後日談がある。乾隆二六年一二月、一六世孫にあたる丁淑儀の「重修東塘三世合墓祖墳記略」には、つぎのように記している。すなわち、徐福の一件ののち、墓地はあらためて整備され、丁儀の墓もここに營まれたが、崇禎年間には丁啓濬の手で再び整備が行われ、黃氏に看守させるなどの處置がとられた。ついで康熙二六年、丁岳は自ら資金を支出し、丁儀の墳墓を修復するとともに、三祖のそれをつくりなおし、環境を保全した。ところが、歲月が経過して乾隆二〇年頃になると、族人の心は離ればなれとなり、祭掃の道具は失われ、墓地や小屋もまたまた墳丁によって盜賣されるにいたった。族人の閒にも争いがはじまった。そこで、乾隆二五年の冬から丁淑儀が中心となつて一族をまとめ、翌年八月に鹿園の墓地を、翌九月には東塘の墓地を修築し、墳丁黃氏らを選んで墓守を依頼することになったとある。

以上にみるとおり、墓地を管理して祖墳を守り、祭祀をつづけるためには、数々の障害を克服しなければならなかった。もっとも、それは必ずしも回族固有の事態ではなかったはずであるが、信仰と教律の維持についてもまた、時代の推移とともに、次第に困難となる状況が存在したことを指摘しておかねばならない。

前掲李廣齊の「垂戒論」(宣德元)に、「其間に眞の色目人なる者有り、偽の色目人なる者有り、妻に従い色目人と爲る者有り、母に従い色目人と爲る者有り。其の異俗に習い、以って我が族類を焚亂し、我が常憲を蔑視し、我が彝倫を駁訛す」と記す一節がある。明初の泉州地方には、一口に色目人といっても、出自を異にする數種の人々がいたことが知られるが、彼らはいずれも、漢族からみると、異俗の持ち主であった。李廣齊は色目人の習俗を、つぎのように整理している。色目者の治喪するや、笙歌鼓舞し、これを實するに柴を以ってし、これに贈るに華を以ってす。衰無く服無し。桐棺は掩わず、而してこれを中野に瘞す。主を爲らず、祀を爲さざるなり。

色目は則ち纏頭被褐、而して跣足するなり。

色目者の齋は、晝は則ち食せず、夜は則ちこれを食す。

市るものは則ち食せず、自ら屠りしものは乃ちこれを食す。豕は則ち食せず、芻は則ちこれを食す。

色目者は其身を刳せざれば成人と爲らざるなり。其書は蚯の如く蚓の如し。其言は鼻の如く馱の如し。中夏は辨じて曉ること能わざるなり。

元朝滅亡後なお日が浅く、彼らがイスラム教固有の習俗を保持していたことがわかる。葬式には棺を用いず、火葬をしないこと、位牌の類をつくらないこと、白布を用いた纏頭、かぶりもの、斷食月、作法に従って屠殺した獸肉しか食べないこと、割禮、アラビア文字の使用など、イスラムの習俗は守られていた。

また、丁衍夏の筆になる「祖教説」によつてみても、始祖節齋公丁謹以來、丁氏が回教の教律と習俗に従つて生活して來たことがわかる。すなわち、死者は重衣せず埋葬し、木棺は使用しない。死者は三日をすぎないうちに葬り、墳墓の

土は薄く長く高くもりあげる。喪服には木棉を用い、祭祀にも位牌などを設けず、供物をならべたりもしない。日が西に傾く頃、皆で西に向つて禮拜する。イスラム暦九月はラマダーン（斷食月）で、日出から日没まで食事をしない。祭神には香花を供えるのみで、酒菓を設けたり、楮帛を焚いたりはいしない。清經を誦するが、傳えられた夷音をまねるだけで、意味はわからず、また、わがらうともしない。吉凶の際にはいずれも清經を讀む。動物は必ず自分で殺したものゝみを食し、肉食するが豚は食べない。つねに沐浴し、そうしなければ敢えて神明に交することはない。衣服は木棉を尊重し、絹織物は身につけず、大率明潔を尚ぶのである、と。

清經つまりコーランは唱えるだけで、意味がわからなくなつていたとはいふものの、回教徒の習俗を保ちつづけて來たのは間違いない。丁衍夏のいうところでは、少くとも、彼の幼年時代までは以上のようなであつたが、その後、次第に様子が變つて來たらしい。彼は萬曆年間を生きたのであるから、變化は中期頃にはじまつたと考えられる。

丁衍夏は嘆きをこめて記している。——死者を埋葬する時には、遺體に衣を重ね、木棺を用い、葬儀も日數をへてから行うようになった。喪服には麻と木棉が半々となり、祭祀には位牌を設け、棺は深い穴のなかにおさめられるようになった。さらに、祭祀にあたつては供物をならべ、犠牲にも肥つた動物を用い、天を拜することも少く、斷食月の行事もなくなった。動物を殺すのも、自分で作法にのつとて殺す必要はなくなった。衣服には絹織物が使われ、交神するのに沐浴もせず、祖先を祭るのに酒菓を設け、楮帛を焚く者もあらわれた。喪服に麻を用い木棉を用いない者、死後十數年たつてから葬式を行う者、吉凶の際に道士や僧侶をよぶ者、豚肉を食べる者まであらわれるにいたつた、と。

他事はともかく、「吉凶に黃冠浮屠を用いる者有り、食するに豚を以てする者有り」とあるのは、棄教あるいは背教とほとんど同じといつてよからう。強韌な宗教的紐帶をもち、背教者に厳しい宗教共同體といわれる回族の社會から、このような人間が出てくるというのは、ほとんど信じられない事柄である。豚肉を食する點についていえば、「燕支蘇氏族譜」におさめる「世祀誌」祭品舊式の條に、諱日・春祭・秋祭の供物として「猪肉」があげられ、祭品新式の條にも、元

且の祭祀のあと、參列者に享せられる碗に「猪肉貳片、猪肝貳片」をいれると記している。清稗類鈔・飲食類・回教徒之飲食の條にいうとおり、内地に住む回教徒の飲食品のうち、漢族と異なるのは、ただ一つ、豚肉とその油を使用しないことにあるが、「祭祀誌」の記載が回族であるのをカムフラージュするためのものでないならば、それすら完全には守られぬ狀況が、一部ではあるうが、すでに明末以降に生れつつあったことの、もう一つの證據となるであらう。

## 五

イスラムは宗教であると同時に政治であるといわれる。單なる個人の精神生活に限定される信仰ではなく、それは生活の全體的規範であり、社會秩序である。だから、イスラム的生活規範と社會秩序を教律にしたがって嚴格に維持するためには、政治力の介在が不可欠だということになる。ところが、イスラム主權國家の領域外に住む教徒は、それぞれの國家の主權の下に、その國の法律制度、風俗習慣のなかで生活を営まねばならない。當然、そこには様々の妥協が生ずるはずである。陳江丁氏のような衣冠の族があらわれたこと、族譜をもち、私有の墓地と祖墳を維持し、祭祀をつづける者がいたのは、そうした妥協の結果と理解することができる。

また、田坂興道氏によれば、「回教徒は明一代をつうじて、政治上甚だしい壓迫を加えられた事實はない。しかし元初以來醞釀されていた社會一般の回教徒への反感は抜き難いものとなり、中葉以後ますます回漢對立の溝を深くするに至った」<sup>(33)</sup>とあるような環境のなかで、泉州の回教徒がどのように暮して來たか。そこには、棄教あるいは背教と認めて差支えない行爲が存在し、彼らが漢族のなかで暮した歲月の重みを實感させると同時に、彼らを取りまく環境がいかに過酷であったか、を知ることができる。「三箇回回是回回、兩箇回回是回回、一箇回回不是回回」という諺が何時頃生れたか不明であるが、回族の宗教的紐帶が弱體化しつづけたのは事實であつたらう。

ところで、中國が多民族國家であることは、誰でも知っているが、少數民族とその歴史については、從來、あまり關心

が寄せられなかった。回族については、他の少数民族と比べると、やや事情は異なるけれども、充分であるとはいえない。<sup>(34)</sup>その理由は、中國の歴史書がはやくから定型化して、回族に關する記事などは記述の對象とされなかったこと、一方、回族のなかにも文名を馳せた者が少くなかったにもかかわらず、<sup>(35)</sup>彼らもまた、同族の事蹟を記述するのに、甚だ不熱心であったこと、などに求められるであろう。

こうした現状において、『資料選編』は誠に貴重な書物というべきである。在外研究の收穫の一つとして本書を入手したのを機に、本稿は起稿されたのであるが、筆者のイスラムに關する知識は皆無に等しく、回族についての研究の蓄積を、自らもつわけでもない。したがって、中國的回教徒社會成立史の側面に言及しえたかとも考えるが、反面、記述は屢々斷片的であり、特殊現象とみるべきものを強調しすぎて、大きな誤りを犯しているかも知れない。專家の教示をえたいと思う。

## 註

- (1) 趙樸初氏によれば、中國的回教徒は一千萬人を數えるという。(『大公報』一九七九年九月一〇日)
- (2) 田坂興道『中國における回教の傳來とその弘通』(東洋文庫・一九六四)上巻七六一頁以下。
- (3) 陳垣『回教入中國史略』(東方雜誌二五卷一號)、金吉堂『中國回教史研究』(一九三五)、傳統先『中國回教史』(一九四〇)、桑原隲藏『創建清真寺碑』(桑原隲藏全集第二卷・岩波書店・一九六八)、田坂・前掲書。
- (4) 回族の族譜を扱った論文は、中田吉信「中國ムスリムと宗族組織——族譜を中心として見たる——」(東洋學報三八卷一號)
- (5) 宋史卷四八三・陳洪進傳、萬曆泉州府志卷一〇・官守志・陳洪進傳。
- (6) 哈之亭は哈只亭である可能性がある。之と只は同音(hj)であり、哈只はアラビア語の hajj の音譯で、聖地メッカに巡禮した人の稱號である。
- (7) 「陳埭丁姓研究」(海交史研究一九七八・創刊號)
- (8) 「重建丁氏宗祠碑記」(萬曆二八年・黃鳳翔撰)

- (9) 陸深撰「陳江丁氏世家」には、「丁氏之有譜、則始於毅齋府君、繼之以養靜先生、而大備於文範倅松之日也」とある。
- (10) 丁衍夏の「振譜説」によると、丁朗は元の致和元年の生れで、丁善・丁實の兄にあたるが、庶出である故に、第四子におかれたらしい。
- (11) 「明清進士題名碑錄索引」に「洪武三〇年春、莊謙才、福建晉江」とある。
- (12) 同右書に「正統一〇年、莊敏、福建晉江人」とある。
- (13) 「仁庵府君傳」を書いた丁自申は、自らを仁庵府君丁善の六世孫と述べているところから、ここに一代を加える必要が生ずる。
- (14) 閩書卷八六・英舊志・丁自申傳、萬曆泉州府志卷二〇・人物志・丁自申傳。
- (15) 「三陵集」丁自申撰。莊爲璣『泉州地方志論集』（泉州歷史研究會・一九八二）には、泉州市志編纂の資料の一つに挙げられているが、未見。
- (16) 萬曆泉州府志卷一五・人物志・丁日近。
- (17) 萬曆泉州府志卷一五・人物志・丁啓濤。
- (18) 萬曆泉州府志卷一五・人物志・丁儀。
- (19) 註(7)論文。
- (20) たとえば、鄭和の家系がそれにあたる。李士厚『鄭和家譜考釋』（昆明・一九三六）を参照。
- (21) 正徳一〇年に丁儀が書いた「譜敍」に「功叔養靜公諱彰、生平行義」とある。
- (22) おそらく、丁陞は人名であろうが、「爭財之訟」の詳細は

不明。

(23) 後述の、徐福との墓地をめぐる訴訟事件との関係から考えて、二十有八年とするのが妥當であろう。

(24) 桑原隲藏『蒲壽庚の事蹟』（全集第五卷）六四頁。田坂興道・前掲書上巻四一四頁。

(25) 前嶋信次「元末の泉州と回教徒」（史學二七卷一號）

(26) 前嶋前掲論文によると、亦思巴晏とは「ベルシャ語で軍隊を意味するイスバーハ Isbar, または兵士、騎士などを意味する Spah と關係ある言葉」だという。また「彼等の戦法は騎兵を主とし、刀牌即ち劍と楯と弓箭とであったとあるから、そのさまは丁度、十三四世紀ころのベルシャのミニャチュールに描かれた騎士の如きものであったと想像される」ともある。

(27) 萬曆泉州府志卷一〇・官守志、陳駭傳。

(28) 泉州の清淨寺は、中國に現存する最古のイスラム寺院の一つといわれ、筆者が中國で訪れた、唯一のアラベスク様式の清淨寺である。金阿里がこの寺を修理したことは、閩書卷七方域志・泉州府の條に引く、元の吳鑒の「清淨寺記」にもみえる。

(29) 藤井宏「明代鹽場の研究」（北海道大學文學部紀要一・三）

(30) 田坂興道「明代における外來系イスラム教徒の改姓について」（史學雜誌六五卷四號）

(31) 片倉もとこ『アラビア・ノートーアラブの原像を求めて』（NHKブックス・一九七九）には、イスラム教徒の死と葬儀についての報告がある。（二一〇頁以下）

(32) 片倉もとこ・前掲書四七頁に「宗教的掟として、彼らの生活の中で生きているのは、慈悲深く、慈愛あまねきアッラー



の御名において”を唱え、頸動脈を切つて屠殺した動物でないと食べないといけない、という事である」と記している。こうした作法による動物の屠殺が行われているのを、筆者は天津の清真寺で見たことがある。

(33) 田坂興道・前掲書下巻九〇九頁。

(34) わが國における回教研究については、羽田明「わが國におけるイスラム研究—中國篇—」(西南アジア研究第三號)、片岡一忠「日本における中國イスラム研究小史」(大阪教育大學紀要第二部門・二九卷一號)を参照。

(35) 陳垣「元西域人華化考」(北京大學國學季刊一卷四號)

〔追記〕

陳江丁氏にみるとおり、回族のなかからも官僚となる者があつた。彼らが官界生活をつうじて、信仰と教律をどのように維持していたか、興味ある問題ではあるが、『資料選編』には、それに

關する記載はない。それをうかがう資料として、たとえば、儒林外史には二つの敘述がある。その一つ、第四回、廣東高要縣の湯知縣を張師陸と范進がたずね、御馳走になるくたりを紹介してこう。湯知縣は回族である。

「大變ご無禮いたしました。私ども回教徒の酒席には召しあがっていただくようなものがありません。ただ、こんなつまらぬ料理ですが、腹のたしにでもして下さい。私どもの方では牛や羊の肉ばかり用いますが、あなた方の宗教では、これは召しあがりますまい。それで席に出すのをひかえました。」

湯知縣は豚肉を食べない教律を守っていたようであるが、公的な宴席ではどうであつたのか。この點に關連して、清稗類鈔・宗教類・回教徒不食諸肉の條には、つぎのようにある。

……凡以回籍服官者、海擢至三品、即須出教、以例得蒙賞喫肉不能辭也。

こうした慣行が何時頃から生れたのか、それはわからない。

history. But this basically pessimistic attitude is then connected with his theory of ether (*qi* 氣), the force of which heaven, earth, and the myriad beings are composed, and which is increasingly weakened as time passes on. Yet this ether influences history as the irresistible force of destiny that causes the arising of selfish movements in some periods. Separate from this transcendental power, ether's force of destiny (*qishu* 氣數), Zhu Xi also acknowledges the force of necessity inherent in the course of history itself. This he calls the trend of events (*shishi* 事勢). In Zhu Xi's understanding of history based on the four forces of ether, trend (*shi* 勢), principle (*li* 理), and man (*ren* 人), his detached view of the reality of history can be recognized, as much as his enthusiasm about its salvation.

## ON THE MUSLIMS IN QUANZHOU 泉州 UNDER THE MING DYNASTY

TERADA Takanobu

This article is based on the main materials presented in "*Selections From Muslim Genealogies of Quanzhou* 泉州回族譜牒資料選編" (ed. by the Society for Historical Studies of Quanzhou 泉州歷史研究會, Aug. 1980). Such genealogies, because of their religious rules, were originally extremely scarce, but from the Song and Yuan dynasties onward they can be found in Quanzhou, which had a rather strong Muslim population.

My material has been selected and organized on the basis of four Muslim genealogies: those of Ding of Chenjiang 陳江丁氏, Li of Rongshan 榮山李氏, Jin of Qingyuan 清源金氏 and Su of Yanzhi 燕支蘇氏, but here I mainly concentrate on the information given in the Ding of Chenjiang text. The various questions of the lineage, social life, beliefs etc. of the family are discussed. After having passed through the turbulences at the end of the Yuan period and establishing themselves firmly in Quanzhou, these Muslims were gradually Sinicized and developed a unique society of their own. Studying them, a part of Chinese Muslim history is clarified.